The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ドーノワ夫人のおとぎ話「オレンジの木と蜜蜂」における戦うヒロイン像
Author(s)	中島, 姫奈
Citation	Gallia. 2025, 64, p. 43-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102146
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ドーノワ夫人のおとぎ話「オレンジの木と蜜蜂」における戦うヒロイン像

中島　姫奈

はじめに

ドーノワ夫人によるいくつかのおとぎ話には、男装して騎士になったり武器を持って自ら敵と戦うヒロインが登場する。彼女たちがそうする理由は様々だが、いずれの物語においても時に攻撃的なまでの勇敢さと決断力を持って行動する。

本論文では、それらの物語の一つ、*L'Oranger et l'Abeille*（邦題：オレンジの木と蜜蜂）を対象とし考察する。これは鬼に育てられたAimée（エメ）姫とその従兄Aimé（エメ）王子がles ogres（便宜上、本論文では鬼と表す）から逃れるために様々な変身を繰り返す物語である。鬼たちの中で育った姫は人の言葉を話せず野蛮人のような格好で野山を駆け回り、知恵を駆使して王子を守り、鬼と戦う勇敢さを持つが、女性的な美徳や優しさを欠くことはない。一方で王子は姫に守られ、自ら前に出て戦わない。このヒーローとヒロインの性的役割の逆転、英雄的な強さと女性の美徳を併せ持つ戦うヒロイン像を変身のモチーフとなったオレンジの木と蜜蜂、戦う少女、女神の表象から分析していく。

Ⅰ．変身と性的役割の逆転

エメ姫とエメ王子は鬼女の追跡を逃れるため、姫が魔法の杖を振って言葉を唱えることで3回変身する。1度目は王子が小舟に、姫が漕ぎ手の老女に変身する。この時姫は自分が王子を導くようにと唱えている。2度目は姫が小人に、王子が女性の肖像画に変身する。3度目は王子がオレンジの木に、姫が蜜蜂に変身する。

いずれの変身でも王子が自分の意志では動けない無生物あるいは植物に、姫が動く生き物になって王子を守り鬼女と闘う。王子は常に姫に守られ、物語において自ら闘い敵を倒すことはない。15年間行方不明になっていた従妹を探す途中で海難事故にあって鬼の島に流れ着いた時に姫に助けられてから彼女に介抱されて匿われ、鬼に居場所が発覚して捕まった時も姫の気転によって助けられ、オレンジの木に変身してからは、オレンジの木と蜜蜂に変身した時にいた森の主であるランダ姫に枝を切り落とされて血を流すといった、一貫して受動的かつか弱い印象を受ける存在として描かれている。

ナディーヌ・ジャスマンによれば、エメ王子は自力でその場から動けないオレンジの木に変身することで弱者の立場に置かれ、枝を切り落とされることによって男らしさを奪われている[1)]。一方で姫は小人と蜜蜂に変身した際は針で鬼女を刺

1）Nadine Jasmin, *Naissance du conte féminin., Mots et merveilles : les contes de fées de Madame*

して撃退し、オレンジの花を摘もうとしたランダ姫を怒って針で刺すといった攻撃性を持っている上に、醜く性質の良くない人喰い鬼の息子との結婚を自分には相応しくないからと拒み、自分の意志で王子を助けて匿い、魔法の杖を盗んで逃亡するといった、常に自分の意志をしっかりと持った行動力のある存在として描かれている。この能動的なヒロインと受動的なヒーローの対比を、ジャスマンは物語の女性化と述べている[2)]。男性の英雄が演じることの多い戦闘、冒険をヒロインが担い、敵に囚われたり英雄に救い出されるといったヒロインに起こりがちな出来事がヒーローの身に降りかかっている。そもそもこの物語においては女性が上位、強い権限を持った存在として描かれている。例えば王子と姫を追跡する鬼女トゥルマンティーヌは夫の男鬼より頭が切れ、物事を決める時は必ず彼女の意志が通り、配下の小鬼たちを従えて命令を下す。森の主であるランダ姫は豪華な城に住み富と地位、美貌、学識を持つが若い男を寄せ付けず、結婚を拒んでいる。ドーノワ夫人は性的役割を逆転させることで男性主人公の冒険を取り去り、か弱い少女というよりは戦士のようなヒロインに命を吹き込もうとしたという[3)]。また、エメ姫はオレンジの木になった王子に対してこのように述べている。

> Que tout ce qui est à vous m'appartient, et que je défends mon bien, quand je défends vos fleurs?[4)]
>
> あなたのものはすべて私のものであり、あなたの花を守るとき、私は私の財産を守るのですよ？

ここから、自分がずっと王子を守ってきたのだから、王子の一部である花を自分の財産である主張するほどに強い所有欲を抱いていることが分かる。これは女性、ヒロインを勝利、活躍、出世における報酬や財産とみなす英雄的な所有欲であるようにうかがえる。また、蜜蜂は針を武器とするが、剣や針などの鋭利な刃物は男性性の象徴である[5)]。

エメ姫の能動性と攻撃性、所有欲は当時の女性の美徳とされた謙虚さや慎みからは大きくかけ離れているが、彼女の行為を完全に男性的と断言するには注意が必要であると考えられる。彼女はその風貌を作中でこのように表されている。

> Elle [la princesse Aimée] s'était fait un habit de peau de tigre; ses bras étaient demi-nus; elle portait un carquois et des flèches sur son épaule, un arc à sa ceinture; ses cheveux blonds n'étaient attachés qu'avec un cordon de jonc

d'Aulnoy（*1690-1698*）, Paris, Honoré Champion, 2002, p. 405

2）*Ibid*, p. 404

3）*Ibid*, p. 406

4）Madame d'Aulnoy, *Contes des Fées suivis des Contes nouveaux ou Les Fées à la Mode*, édiditon critique établie par Nadine Jasmin, volume 1, Paris, Honoré Champion, 2002, p. 359.

5）田村公江、「精神分析におけるファルスの意味：少女戦士の剣のシンボリズム」『フォーラム』14、跡見学園女子大学文化学会、1996、p. 29-46

marin, et flottaient au gré du vent sur sa gorge et sur son dos; [...] elle traversait les bois comme une seconde Diane[6].

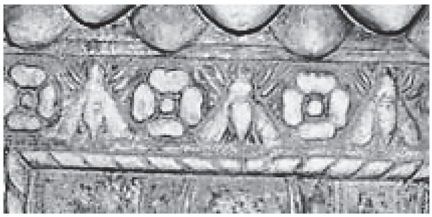
エメ姫は虎の皮の衣装を仕立て、彼女の腕は半分むき出しだった。彼女は矢筒と矢を肩に担ぎ、ベルトには弓を下げていた。彼女のブロンドの髪は海草の紐だけで結ばれており、風になびいて喉を通って背中に流れていた。[…]彼女は第二のディアナのように森を渡った。

虎の毛皮を纏って弓矢を携え、野を駆ける姿は狩猟の女神ディアナに例えられている。ディアナは攻撃性と戦闘力を持った活動的な女神である。キリスト教以前の異教の女神は淑やかで優しいだけの存在ではなく、むしろ恐ろしい側面と強力な支配権を持っていた。エメ姫は容姿だけでなく性質、行動もまさにディアナのようであると言えるだろう。さらに、後述のように、彼女が変身した蜜蜂はディアナと深い関連性がある[7]。

次章では、蜜蜂とオレンジの木の表象を掘り下げながら探っていく。

Ⅱ．蜜蜂とオレンジの木の表象

前章において蜜蜂は女神ディアナと関連があると述べた。ギリシア神話においてはディアナのシンボルとされ、エフェソスのアルテミス（ディアナ）像の腰部分に彫られている。



8）

その他にも、蜜蜂は生命力や復活の象徴であるとされる[9]。能動性と勤勉さからキリスト教においては共同体と労働の象徴とされ、また王権の象徴でもあり、メロヴィング家由来のシンボルであったという[10]。聖職者や支配者は蜜蜂のイメージを好んできたという。よって蜜蜂への変身は王権、つまり支配権を持った女性のイメージであるように考えられる。また、蜜蝋は蜜蜂が肉体の交わりなしに産み出

6）Madame d'Aulnoy, *op.cit.*, p. 339.
7）クレア・プレストン『ミツバチと文明』、倉橋俊介（訳）草思社、2020、p. 37
8）http://antique-gallery-soleil.com/products/detail.php?product_id=3902 2024.10.8
9）クレア・プレストン、前掲、p. 30.
10）小宮正弘、「ナポレオン紋章におけるオリエントの出現」『静岡産業大学国際情報学部紀要』5、p. 42-52、p. 33.

したものであることから、蜜蜂と聖母信仰は密接に結びついている[11)]。これらの表象から、蜜蜂には活動性と純潔のイメージがうかがえる。さらに、ウェルギリウスの「蜜蜂は腐った牛の死骸から生まれる」という詩の一節から、全く異なる生物から生死を超えて生まれ出てくる変身かつ自然の驚異であるとされる[12)]。このように蜜蜂は変身、再生とも関連性がある。ドーノワ夫人が蜜蜂の表象をどこまで理解した上で用いたのかは先行研究を分析した限りでは明確には分かっていないが、彼女のおとぎ話が神話や古い民間伝承に依拠していることから、ウェルギリウスの詩やディアナの象徴とされる点は知っていたと考えられる。
物語の最後で妖精によって出生が明かされたエメ姫は毛皮を脱ぎ捨てて比類なき美しさの衣装に着替えて身分を回復するが、まさに野性から文明社会への回帰、野性児から高貴な姫君への再生といえる。

一方でオレンジは多産、純潔の象徴であり、結婚式に花嫁が花冠を被ることから結婚のシンボルとされる[13)]。17 世紀の寓話の時代において、男性から恋人への贈り物とされることから、愛の象徴でもあるとされる[14)]。いずれにせよオレンジは女性的要素の強いモチーフであると考えられる。ドーノワ夫人が愛の贈り物とされるオレンジに王子を変身させることは単なる男らしさの欠如だけではなく、男性にも純潔、結婚における誠実さが必要であると考えていたのではないか。実際、王子は戦うことこそなくともエメ姫に対して誠実であり、物語の終わりにその性質が魅力的であると賞賛されている。

活動性と純潔性は女神ディアナと関連し、エメ姫自身も蜜蜂のように動き回り、おそらく純潔である。蜜蜂への変身はよりディアナのイメージを強調しているようにうかがえる。よって、エメ姫の攻撃性は男性的というよりも古い時代の女神の要素が強いのではないだろうか。弓矢を携え駆け、獲物を狩るディアナと針を備えて飛び回り、敵を刺す蜜蜂はどこか似通っているように考えられる。蜜蜂に変身した姫は鬼女を千回も刺す快楽を味わっている[15)]が、ディアナは死をもたらす矢を放ち老若男女問わず殺戮する恐ろしい女神である。

また、山本佳生は論文中でホラティウスの詩において詩歌や言葉を取り出す作業を蜜蜂が飛び回って蜜を集めることに例えられていることに言及し、これは読書による知識の収集であると解釈している[16)]。エメ姫は教養どころか人の言葉すら話せなかったが、王子と愛し合うようになってから言葉が通じないことをもどかしく思い、鬼女から盗んだ魔法の杖に願って恋人である王子と同じ言葉、つまり

11）佐藤仁、「教皇ウルバヌス　8　世の治世における蜜蜂表象に関する研究」『成城大学美術史』23、成城大学、2017、p. 52.
12）内田次信、「ウェルギリウス『農耕詩』第 4 歌における二箇所のブーゴニア談：蜜蜂の奇跡的再生と変身の神話」、『神話学研究』1、ギリシア・ローマ神話学研究会、2017、p. 2-28, p. 4
13）ピエール・ラスロー『柑橘類の文化史　歴史と人との関わり』、寺町智子（訳）、一灯舎、2010。
14）藤原恵子、「指小辞を手がかりに読む「サンドリヨン」（その 2）」、『京都産業大学論集』43、京都産業大学、2011、p. 59-96、p. 78.
15）Madame d'Aulnoy, *op.cit.*, p. 356.
16）山本佳生、「蜜蜂のあとを追って - モンテーニュとエラスムス -」『総合人文科学センター研究誌』7、早稲田大学、2019、p. 249-258、p. 251.

人間の言葉を話せるようになる。この人間の言葉とはウィットに富んだ美しい言葉であり愛を語る言葉、つまり文学サロンで用いられていたような言葉であるとされる[17]。人間の言葉を話せるようになってからエメ姫は王子とのやりとりに何度か4行詩を読んでおり、文学的な素養を身に付けていることがうかがえる。さらにエメ姫は、ランダ姫の美貌と教養、地位と比較して自分を «une princesse infortunée, que vous avez vue couverte d'une peau de tigre, au milieu de plusieurs monstres qui ne lui ont donné que des manières dures et barbares, et dont la beauté est trop médiocre pour vous arrêter.[18]»「過酷で野蛮な態度しか与えなかった、数人の怪物どもの真っただ中で虎の皮をかぶった不幸な姫であり、その美しさはあまりにも平凡すぎてあなたを留めることができない」と嘆いていることから、野性の中で言葉も話せず自分の美しさも世の中の事象も何も知らなかった状態から人間の美しい言葉を知り、話せるようになったことで自分の野性を恥じて教養を身に付けることを求めるようになったようにうかがえる。女性と教養はドーノワ夫人のおとぎ話において重要なテーマであり、ほとんど全ての物語においてヒロインは高度な教養、特に文学的な素養に優れている。言葉が通じなくとも、王子は姫の誠実な優しさによって彼女を愛するようになったが、

> ce langage [la langage de la princesse Aimée] dur et barbare qui sonne si mal dans sa belle bouche, me（le prince）laissent craindre quelque aventure plus funeste que celle qui m'est déjà arrivée ![19]»
>
> 彼女（エメ姫）の美しい口からはとても邪悪に聞こえるこの辛辣で野蛮な言葉を聞くと、すでに私（王子）に起こったものよりもさらに致命的な出来事が起こるのではないかと私は恐れている。

上記のように彼女の口からその美しい容貌とは似つかわしくない野蛮な言葉が発せられることを恐ろしく思っていた。どんなに姫が美しく優しくとも、野蛮な鬼の言葉を受け入れることはできず、愛し合う関係を継続するためには美しい言葉を話せるようになる必要があった。物語の最後に身分を回復した姫はその才気によって賞賛の的となった。このように言葉や知識という観点から見ると、少女の蜜蜂への変身は文学サロンの女性と彼女たちを対象としたおとぎ話において非常に重要な意味があると考えられる。

次章では、戦う少女というモチーフを、ディアナを主とした女神およびドーノワ夫人の他のおとぎ話における戦うヒロインと照らし合わせて検討する。王子が攻撃性のない穏やかで、かつ受動的な人物として描かれている点を女戦士と恋人の神話上の事例を見ながら探っていく。

17）Nadine Jasmine*op.cit.*, p. 407
18）Madame d'Aulnoy, *op.cit.*, p. 359
19）Madame d'Aulnoy, *op.cit.*, p.342

Ⅲ．戦う少女と穏やかな恋人

エメ姫は戦う少女であり、彼女が喩えられたディアナは活動的な戦う処女神である。エメ姫は自身の出生を最後まで知らなかったが、鬼の島に流れ着いた時に身に付けていた産着や装飾品から高貴な生まれであることを確信しており、狂暴な人喰い鬼の息子と結婚して子供を産むことを拒絶していた。結婚の強制への抵抗はドーノワ夫人のおとぎ話における重要なトピックの一つだが、このエメ姫の様子は乱暴な男に貞操を汚されることを拒むディアナの要素が見られる。ディアナは自身の純潔を汚そうとしたアクタイオンを、猟犬をけしかけて噛み殺させるといった[20]惨たらしい形で死に追いやる。エメ姫は直接手を下してこそいないが、策を巡らして鬼の息子が王子と間違えられて実の両親に食い殺されるように仕向けている[21]。物語においてその様子は、エメ姫の聡明さと王子を守る強さを強調するように描写されているが、人を食らっていた鬼が同じ鬼、しかも両親によって子供が食い殺されるように仕向けるとは極めて残酷である。しかしドーノワ夫人のおとぎ話においてはヒロインに結婚を迫ったり、乱暴を働いた男が残酷な方法で殺される事例は多く見られる。結婚の強制への抵抗というテーマはドーノワ夫人自身の不幸な結婚生活が少なからず投影されていることがうかがえる上に、乱暴な男、自分を汚そうとする男を罰する力を持つ女性を物語に登場させることで女性に決定権を持たせようとしたのであろう。他の多くの物語では男を罰するのはヒロインを助け導く、ある種の母神的な妖精だが、この物語においてはヒロインが自ら策を巡らしている。母神的な妖精ではなく戦う処女神的なヒロインが物語の中で強い決定権を持っている。策を巡らす様子は知恵の女神ミネルヴァを彷彿とさせる。ミネルヴァもまた純潔の誓いを立てた処女神であり、高度な知性を備えている。

戦う少女が登場する民話は世界中にあるが、多くが武装して狩りをし、冒険する。男装したり男のような振る舞いをすることがあっても、完全に男になったり、女性的な要素を失くしたりはしない。男装している間は封じ込めていても完全になくなるわけではないことが多い。エメ姫は鬼の言葉を話して野を駆けまわっていても

> elle vivait dans une parfaite ignorance de toutes les choses du monde; elle ne laissait pas d'avoir d'aussi bons principes de vertu, de douceur et de naturel, que si elle avait été élevée dans la Cour de l'univers la mieux polie.[22]

> 彼女は宇宙で最も洗練された宮廷で育てられたかのように、美徳、柔らかさ、生来の素質という優れた道義を欠かすことはなかった。

20）ヒュギーヌス『ギリシア神話』高津春繁（訳）、岩波文庫、1953。オウィディウス『変身物語』では裸体を偶然見ただけであるが、ここではアクタイオンが女神を犯そうとした説を取り扱う。

21）ペロー「親指小僧」でも同様のやり方で鬼を欺いている。

22）Madame d'Aulnoy, *op.cit.*, p. 338-339.

上記のように「美徳、柔らかさ、生来の素質という優れた道義を欠かすことはなく」、王子が彼女を愛したのも外見の美しさより «des mouvements de tendresse dans son âme»[23]「彼女の魂の中にある優しさの動き」が決定打となっている。例えば、同じように戦うヒロインが登場するドーノワ夫人のおとぎ話、*Belle, Belle ou Chevalier Fortunée* ではヒロインの Belle Belle は男装して騎士 Fortunée と名乗り、ドラゴンを退治するほどの功績を上げるが、最終的に女性であったことが発覚した際に王は彼女に求婚するが、それは彼女の騎士としての功績ではなく女性としての美徳や優しさからである。*Finette Cendron* においても同様で、Finette は鬼をオーブンで焼き殺し頭部を切断する強さを持つが[24]、王子は美しく着飾った彼女の姿と淑やかさによって求婚する。いずれの物語においてもヒロインの相手となるヒーローは作中で戦ったりヒロインを敵から守ったりすることはない。戦うことも策略を巡らせることもなく穏やかで大人しい印象がある。しかしヒーローは優しさ、誠実さといった点で賞賛される。

では、戦うヒロインの恋人が穏やかな気質なのは、性別の逆転、ヒーローの女性化といえるのだろうか。ディアナの神話を探ってみる。ディアナにはオリオンとの恋のエピソードがある。オリオンは腕の良い狩人であり、純潔の誓いを立てたディアナが唯一心を許した男性であった。オリオンは勇敢な戦士的な男性像であり、2 人で狩りをして楽しんでいたが最終的に結ばれることはなかった。一方でディアナと月の女神として同一視、または一側面とされる女神セレーネは穏やかな性質の青年エンデュミオンに恋し、眠ったままの彼との間に 50 人の娘を儲ける。エステル・フランケルによると、エンデュミオンの穏やかさ、受動性は気性の激しいディアナの未発達な部分を補い、優しさを教え、彼女を立てながら繊細さを目覚めさせるという。同志的な戦士は対等な関係で満足するが、内面の不足を補う男性は結婚や育児に関心を誘うという[25]。このフランケルの見解はディアナの戦う強さ、残酷さ主とした性質に着目した上で狩人としての性質のよく似たオリオンと眠ったまま女神の愛を受け入れて不老不死の眠りについたエンデュミオンとの関係性を分析したものである。ドーノワ夫人の作品分析において当てはめるのが妥当なのかは微妙なところではあるが、本論文ではエメ姫が「第 2 のディアナ」と描写されていたことと王子が彼女の優しさに恋をし、最後には

> la princesse Aimée quitta sa peau de tigre pour prendre des habits d'une beauté incomparable.
>
> [...]La beauté et la sagesse d'Aimée jointes à son esprit, la rendirent l'admiration de son siècle; sa chère mère l'aimait éperdument. Les grandes qualités du prince Aimé ne charmaient pas moins que sa bonne mine[...] on

23）Madame d'Aulnoy, *op.cit.*, p. 344.
24）旧約聖書外伝の『ユディト記』における、ホロフェルヌスの首を切るユディトを彷彿とさせる。
25）ヴァレリー・エステル・フランケル『世界を創る女神の神話』シカ・マッケンジー（訳）、株式会社フィルムアート社、2016、p. 303.

nomma le fils aîné du prince et de la princesse, Amour Fidèle.[26)]

[...] エメ姫は虎の皮から、比類のない美しさの服に着替えた。
[...] エメの美しさと知恵は、機知に富んでおり、彼女を世紀の賞賛の的とした。彼女の親愛なる母親は彼女を狂おしいほど愛していた。エメ王子の優れた資質は、その美貌に劣らず魅力的であった。[...] 王子と姫の長男は「忠実な愛」と名付けられた。

と描写されるように、虎の毛皮を脱ぎ捨て姫としての本来の身分を回復し、生来持っていた美貌と才気が賞賛の的となるほどにはっきりと表に現れていることから、王子の資質によってエメ姫が生来持っていた美徳を引き出され、攻撃的な面を持つ野性から妻、そして母へと変容していく様子から活動的かつ攻撃的な処女神ディアナにとって受動的で穏やかな恋人がどのような役目を果たすのかといった見解に沿って考えられるのではないか。

ディアナのように野を駆ける野性だったエメ姫は王子との愛によって美しい言葉を話せるように願い、教養や優雅さを望んだ。そして身分を回復し、王子と結婚し、その才気によって賞賛の的となる。生来備わっていた美徳が王子によって見いだされ、野性から高貴な姫君へと再生した。王子が共に戦う強さを持つが強引な男性であったとしたら、姫に生来備わっていた優しさ、美徳や才気を見出し、引き出すことができただろうか。王子の受動的な人物像は鬼の中で野性のまま育った姫の中の女性的な美徳を引き出し、再生させるために必要であったと考えるならば、王子は女性化した存在ではなく、むしろ女性性を引き出すための男としての役割を担っているのではないか。また、エメ姫と王子の結婚からはAmour Fidèle（忠実な愛）という息子が産まれていることからも、誠実さと女性的な美徳、才気の結びつきから忠実な愛が生まれるとドーノワ夫人が意図していたならば、ディアナ的な女性の強さと能動性を肯定し、女性的な美徳を引き出すためには強引ではなく誠実かつ穏やかな、女性に無体を働くことのない男性を理想としていたのではないだろうか。無論そういった男性像はこの物語に限った話ではないが、強いヒロインと対峙させることで男性の無害性、穏やかさが際立ち、なおかつ彼らの存在によってヒロインの女性的な資質が自発的に表に出てくるように考えられる。

物語の最後の教訓詩において

Avec un tendre amant, seule au milieu des bois,
Aimée eut en tout temps une extrême sagesse;
Toujours de la raison elle écouta la voix,
Et sut de son amant conserver la tendresse.

26）Madame d'Aulnoy, *op.cit.*, p. 362-363

優しい恋人と一緒に、森の真ん中で一人、エメは常に極めて知恵を持っていた。

彼女は常に理性を持ってその声に耳を傾け、恋人の優しさを保つ方法を知っていた。

エメ姫が常に優しい恋人といる間、極めて知恵を持ち理性的で、恋人の優しさを保つ方法を知っていたことが描写されている。彼女は野性ではあったが野蛮ではなく賢明な存在であり、恋人との関係を良好に保っていた。一人でいても知恵や理性を持ってはいるのだが、「優しい恋人と共にある」時に姫の知性や理性が発揮されていることが物語の中では顕著である。王子が怪我をして弱った、穏やかな性質の男性であるために、姫が強さと優しさの両方を備えた存在として描くことができるのではないかと考えられる。

姫は野性の毛皮を脱ぎ捨てて社会化、文明化したが、ディアナのような能動性や活動性は失われたのだろうか。彼女は賞賛の的となった資質を元々備えていたのは事実だが、王子を助け、守る優しさは自発的な行動力と共に発揮されていた。彼女はただやみくもに戦いたいがために攻撃的に針で鬼女やランダ姫を刺したのではない。その行動原理は愛する王子を守るためであった。王子が愛し、引き出した姫の優しさは彼女が能動的であったからこそ表に出たと考えられる。彼女は自らを野蛮であると称しながらも、王子を守ってきたことを自覚しておりそれを恥じている様子はうかがえない。結婚後、彼女は能動性を失って従順になったのではなく、あくまで鬼の言葉や才気の欠如といった野蛮さだけを捨て、守る強さと自発的な行動力は残っていると考えられる。

Ⅳ．むすびに代えて

先行研究において、この物語は性別役割の逆転、ヒロインの男性化とヒーローの女性化であると述べられていた[27)]。

しかし、エメ姫の能動性や攻撃性を男性的な強さではなく活動的な戦う処女神ディアナのイメージに、王子の受動性を女戦士の女性性を引き出し結婚や過程に目を向けさせる存在として解釈すると、エメ姫は野性の中にも優しさと慈愛を備えた女神的な女性像である。そして王子は彼女の美徳や資質を引き出し、成熟した女性へと成長させる存在として、少女を妻、母へと導く役割を果たす男性であると考えられる。姫と王子が同じ名前を持ち、従兄妹であることから外見的特徴も似通っていることが作中でも述べられているが、エメ姫の身分を回復させ、野性から高貴な女性へと再生させるために王子の受動的かつ穏やかな性質が必要だったとするならば、彼らの持つ互いの性質と存在がある種の表裏一体のようにも考えられる。

（大阪大学大学院博士後期課程）

27）Nadine Jasmin, *op.cit.*, p. 405.